



Data

監督：深川栄洋
 原案：『60歳のラブレター』(NHK出版編)
 出演：中村雅俊/原田美枝子/井上順/戸田恵子/伊ッセー尾形/綾戸智恵/星野真里/内田朝陽/石田卓也/金澤美穂/原沙知絵/石黒賢(特別出演)

👁️👁️ みどころ

還暦を迎えた団塊世代必見の映画が登場！あなたは3組の熟年カップルの誰に共感を？私は中村雅俊扮する橋孝平に注目だが、仕事人間ぶりやわがままぶりは同じでも、家族への思いやりは私の方がまし？まあ、そんな目クソ鼻クソの比べ方ではなく、第二の人生を妻や夫とどう向き合って生きていくのかについて、本作を契機に真面目に検討を！まちがっても「しゅうち心 なくした妻は ポーニョポニョ」などと茶化さずに！

<グッドタイミング、団塊世代は必見！

09年1月26日、私は60歳の還暦を迎えた。そして今なお出欠未定だが、7月11日には、中・高校生時代の6年間を過ごした愛光学園の還暦記念同窓会が松山で予定されている。そんな中タイミング良く本作が公開された。

主人公になるのは、還暦を契機に離婚した夫婦、魚屋を営んでいる中、突然妻が病気に襲われた夫婦、不器用な交際(?)の中で結婚を決めることになる、あまり成功していない子持ちの医師と翻訳家として成功している女性、という三組のカップル。その男女関係の様子はさまざまだが、彼らに共通するのは、全員団塊世代だということ。

織田信長の時代は「人間50年」だったし、明治政府が成立した近年100年余りでも、60歳というのはそろそろ「お迎え」がきてもおかしくない年齢。しかし、今や世界一の長寿国となった日本では、平均寿命が男78歳。女85歳だから、私たち団塊世代の60歳は、これからどう生きていこうか、問われることに。もっとも、今後日本人の平均寿命はどんどん低下していくことが予想されるから、60歳以降の生き方がこれほど大テーマになるのは、私たち団塊世代だけかも？

それはともかく、団塊世代の私たちにとってはこの映画は必見！

私には、橋夫婦が一番身近

団塊世代とは1947年～49年の第一次ベビーブームに生まれた男女。約800万人と最も人口比率が高いから、良くも悪くも彼らが日本をリードしてきたのは当然だ。800万人がすべて結婚しているわけではないが、大雑把に言えば、男女半分ずつとして、400万組の夫婦があることになるから、当然夫婦の形は400万通り？

私の60年の人生が本作の3人の男たちと違うのは当然だが、私が一番身近に感じるのは大手建設会社の重役をしていた橋孝平（中村雅俊）それは、子供の出産にも立ち会っていないという共通点を含めて、何事もオレ流を貫きながら人生を仕事一筋に生きてきたことが共通しているため。妻の食事を一度も「うまい」と言ったことがなく、浮気三昧で、60歳を契機に「老害」がいっぱいいる大会社の役員をスパッとやめて、愛人の根本夏美（原沙知絵）の経営する会社に入っていく孝平ほど、私は身勝手ではないと思っているが、それは所詮目クソ鼻クソの問題で、生き方の本質は孝平と同じ。

重役の娘だったという妻のちひろ（原田美枝子）は妻として母として、申し分のない尽くし方をしてきたが、孝平がそれに気付かないのは当然。したがって、還暦を契機として協議離婚を成立させた孝平は自信满满で、それがドツポに入ることに気付かないようだ。弁護士として熟年離婚のさまざまな実態を観察してきた私は、60歳での離婚が女にとって幸せを呼ぶことがあっても、男にとっては概ねドツポだと知っているのだから、私は孝平のようなヘマはしないと小さくガツポーズ・・・？

「ミッシェル夫婦」は、ちと出来過ぎ？

本作のきっかけとなったのは2000年からスタートした住友信託銀行の応募企画で、夫から妻へ、妻から夫へ送られた86,441通のハガキに綴られたラブレターがネタ。

団塊世代の3大キーワードを私流にあげれば、高度経済成長、学生運動、グループサウンズ。今は魚屋のオッチャンだが、若い時の松山正彦（イッセー尾形）は仲間とグループサウンズを結成して、それなりにファンもついていたというから立派なもの。もっとも、プロになれるはずはなく、父親が倒れて実家を継いだらしいが、それでも集団就職で大阪に出て来た追っかけの光江（綾戸智恵）をナンパして結婚したのだからそれなりに幸せ。

そう思ったのは大まचाがい、この夫婦の日常はバトルの連続のようだ。しかし、糖尿病で苦しむ正彦を「こら、糖尿！」と悪態をつきながら支えてきた元気いっぱいの妻に脳腫瘍が発見されるとは、人生は何とも皮肉。しかして、手術を決意し入院した光江の言葉に従って押し入れを開けた時、そこに発見したマーチン・ギターとは？この「ミッシェル夫婦」の「純愛」は、ちと出来過ぎ？

こんなカップルは異例中の異例

本作を鑑賞した5月24日午後1時半からの『たかじんのそこまで言って委員会』で観たのが、勝谷氏の灘高時代の同窓会の風景。そこで気がついた灘と愛光との共通点は、圧倒的に医者が多いこと。松山では愛光出身の医者は質量とも圧倒的な存在感を示しているし、全国に散らばっている医者や教授も多い。その99%はいわば勝ち組で成功者と思われるが、血を見ることや人付き合いが苦手や細菌の研究ばかりしていたという医師、佐伯静夫(井上順)はどちらかという負け組の医者らしい。今時、「ベン・ケーシー」と聞いても何のことかわからない人が多いだろうが、それを含めて静夫の不器用な60歳なりの生き様をじっくりと。

もっとも人間はよくしたもので、その不器用な生き方を補うのが5年前に亡くなった妻との間に生まれた、目下高校受験を控えているしっかり者の一人娘、佐伯理花(金澤美穂)。早熟な理花は「こんな人ならOKだよ」とある女性との再婚を父親に勧めていたが、料理が下手でケバい化粧の長谷部麗子(戸田恵子)は、いくら有名な翻訳家であっても母親としては願い下げ。食事会の席でそんなことをはっきりと理花から宣告された麗子は大ショック。これにて、静夫と麗子のホンワカとした熟年の恋は終わりを告げたと思われたが・・・

映画はハッピーエンドだが、現実とは？

松山夫婦の危機は光江の脳腫瘍の手術が成功するかどうかだけの単純なものだが、その成功に、正彦がマーチン・ギターの弾き語りで歌った『ミッシェル』はいかなる効用を？ それに対して、離婚した橋夫婦はちひろに興味を示す著名ミステリー作家の麻生圭一郎(石黒賢)が登場し、食事攻勢の他、ちひろの若い時の夢だった北海道のラベンダー畑見学と一緒にいこうと言い始めたから、ちと波乱含み。そして、ちひろの将来はバラ色？

それに対して、孝平は自分の力が個人の力ではなく、会社をバックにしたものに過ぎなかったことを思い知らされた上、新しい会社で若い連中に溶け込むことができなかったから最悪。もちろん、家では魚一匹うまく焼けないから、そのイライラはピークに。そんな孝平に新たな変革をもたらしたのは、ちひろとの新婚旅行中に訪れたことのある四国の写真館の息子、北島進(石田卓也)。何とも律儀な写真館があったもので、30年前にちひろが書いたラブレターを孝平に手渡すため、わざわざ進は東京まで出かけてきたらしい。その手紙を読んだ孝平は、その後あっと驚く行動をとることに。この行動がちょっと出来過ぎなら、最後のハッピーエンドもかなり出来過ぎ。まあ、映画はこんなハッピーエンドでも良いが、現実には熟年離婚した夫婦に再びこんな幸せが訪れることはありえないはず・・・。

他方、静夫と麗子の恋のキュービッドになったのは、意外にもあれほど麗子を嫌っていた静夫の娘の理花。理花が考え出したこんなくさい演出で、団塊世代の男と女が結びつくことになるのだから、14、5歳といえども女は怖い。まあこちらも、映画ならではの幸せなゴールインであることを肝に銘じておかなければならないだろう。

第一生命の川柳は？

住友信託銀行の企画には86,441通の応募があったが、第一生命が毎年やっている「サラリーマン川柳コンクール」は、今年22回目を迎え、5月22日は入選作品100句から、一般投票で選ばれたベスト10が発表された。その第一位は、「しゅうち心なくした妻はポーニョポニョ」。

本作にはそんなけしからん妻は登場しない。そして、86,441通の応募はきっと還暦を迎えたこれからを妻や夫とどう向き合い、どう生きるのかという真面目な思いを綴ったものばかりのはず。しかし、400万組の団塊世代の夫婦の大半の妻は、この第1位となった川柳のような姿になっているのでは？第1位はユーモアたっぷりだが、第2位の「久しぶりハローワークで 同窓会」や第3位の「ぼくの嫁 国産なのに 毒がある」は厳しい社会情勢を繁栄した皮肉いっぱいのもの。

まあ、60年間も生きてきたのだからこの川柳のように人生を冷やかすのも良いが、たまには本作のように真面目に還暦以降の人生を考えることが大切では？

2009(平成21)年5月25日記

愛声会では『人生の扉』が定番に！

昨年77歳の喜寿を迎えた羽佐間正雄さん主催のゴルフ会「愛声会」は、09年10月26日に23回目を迎えた。参加者は152名。プロ野球、ゴルフ、スキー、マラソン等のスポーツ界から落語、芸能界までそうそうたる著名人が勢ぞろい。私は4回目の参加だが、今年をはじめて雨にたたられ、9ホールで終了。しかし、そのおかげで約4時間にわたる懇親会と賞品授与式は大盛會に。今やすっかり水戸黄門様が板についた里見浩太郎さんの歌もタップリあるから、見方によってはこりゃディナーショー？他方、毎年参加されていた映画監督の松林宗恵さんが亡くなられたため、羽佐間さんが哀悼の意を込めて彼の代表作『連合艦隊』(81年)の主題曲である谷村新司の『群青』を歌ったから、き

っと松林宗恵監督も喜ばれたことだろう。そんなすごい会で、懇親会の最初に指名される数名の歌手(?)の一人が私だが、ここ3年連続で歌っているのが竹内まりやの名曲『人生の扉』。毎年歌詞カードを配布しているのがミソで、会場の皆さんは集中して私の歌を聴いてくれている。今年も「弱っていくことは悲しい、年老いていくことは厳しい、そこでみんなは人生なんて意味がないよと言う。しかし、私は信じている。生きていくってことはそれだけで価値があるのだということを・・・」というすばらしい歌詞をかみしめていただいた。やっと60歳になった鼻たれ小僧の私としては、これからも毎年「人生の扉」を切り開いていかなければ！

2009(平成21)年11月5日記